

博士論文（要約）

意見文産出におけるマイサイドバイアスの生起メカニズム
およびその克服支援方法の検討

小野田 亮介

説得的な意見文を産出するためには、自分の立場の利点を一方向的に示すのではなく、自分の立場の不足点や限界点といった「反論」に言及した上で自分の主張を述べる必要がある。すなわち、自分の立場（主張）がなぜ正当性を欠いているのか、あるいはなぜ妥当だといえないのか、といった反論についても言及し、その反論に自分なりの「再反論」を行うことが反対立場の説得において重要になるといえるだろう。しかし、反論想定や再反論は我々にとって必ずしも容易なことではない。なぜなら、我々は意見を主張する際に、自分に有利な賛成論は積極的に提示するものの、自分に不利な反論の提示には消極的になるという「マイサイドバイアス (my-side bias)」と呼ばれる認知的偏りを有するためである。したがって、説得的な意見文産出能力の育成を目指す上では、マイサイドバイアスの克服に焦点を当てた特別な指導を行うことが必要不可欠だといえる。

そこで第 1 章では、まず「意見文産出におけるマイサイドバイアス」が先行研究においてどのように捉えられているかを概観した。その結果、マイサイドバイアスは話し言葉、書き言葉を問わず推論活動や意見産出活動全般で生起しており、児童から大学生以上まで広く確認されていることが示された。このことは、マイサイドバイアスが年齢的発達や学習経験に応じて自然に克服されるバイアスではなく、克服を目的とした指導を行うことが必要になることを示唆している。そこで第 2 章では、意見文産出におけるマイサイドバイアスと関連する要因を明らかにするため、文章産出研究と認知バイアス研究を中心とする先行研究を概観した。その結果、「どのように書くか」に関する「意見文スキーマ」と、「何を書くか」に関する「理由想定」が意見文産出におけるマイサイドバイアスの生起メカニズムに深く関連している可能性が示された。ただし、マイサイドバイアスの克服を目的とした先行研究では、マイサイドの生起メカニズムをふまえた介入方法を実施してきたというよりも、むしろ対処療法的な介入を行っており、介入に効果が見られたとしても、その効果が生じたメカニズムやプロセスについては十分な説明がなされていないという限界点も見出された。そこで本稿では、(1) 意見文産出におけるマイサイドバイアスの生起メカニズムについて「意見文スキーマ」と「理由想定」という観点から明らかにし、(2) その検討結果をふまえて、小学校から高校の作文指導で実行可能なマイサイドバイアスの克服支援方法を提案することを目的とした。

第 II 部では「意見文スキーマ」に着目し、学習者がマイサイドバイアスを克服した意見文を「説得的な意見文のスキーマ」として活性化しない原因について検討を進めた。第 4 章（研究 1）では、大学生 164 名を対象に、マイサイドバイアスの克服が意見文の評価に与

える影響を検討した。その結果、文章構造の異なる意見文を相対的に評価する「相対評価法」の条件では、マイサイドバイアスを克服した意見文の説得力が高く評価される一方で、文章構造の異なる意見文を独立で評価する「独立評価法」の条件では、マイサイドバイアスを克服することが説得力評価の向上に寄与するわけではないことが明らかになった。すなわち、1つの論題について1つの意見文だけを評価するという条件では、反論想定や再反論の説得力評価に対する正の影響はほとんどみられないことが明らかになった。それでは、独立評価法においてマイサイドバイアスを克服することの意味はないのだろうか。第5章（研究2）ではこの問いについて、大学生100名を対象とし、意見文を読んだ直後の即時評価だけでなく、意見文を読んだ1週間後の遅延評価にも着目して検討を行った。その結果、研究1と同様にマイサイドバイアスを克服することは即時的な意見文評価とは関連していなかったが、説得力評価を維持するという点で遅延的な説得力評価に寄与する可能性が示された。日常生活や学校生活において複数の意見文を読み比べる「相対評価法」による評価の機会が乏しいことや、遅延的な評価を行う機会がほとんどないことをふまえると、学習者が反論想定や再反論に説得力を高める機能があると「自然に」気づくことは難しいと考えられる。第6章（研究3）では、こうした意見文の説得力評価と意見文産出との関連を、高校生60名を対象とした授業内実験研究によって検討した。その結果、マイサイドバイアスを克服した意見文を説得的だと評価する学習者ほど、実際にマイサイドバイアスを克服した意見文を産出する傾向にあることが示された。

第Ⅲ部では「理由想定」に着目し、学習者が反論想定に困難さを示す原因を「書き手の立場」という観点から検討した。第7章（研究4）では、専門学校生106名を対象に理由想定と書き手の立場との関連について探索的な検討を行い、反対立場の利点を指摘する反論に比べ、自分の立場の欠点を指摘する反論の方が想定が困難になることを指摘した。そして、そうした反論想定への偏りは、俯瞰的かつ批判的な思考が求められる役割を与えることで改善できることも明らかになった。ただし、研究4ではあくまでも立場選択と理由想定への傾向に相関関係が見出されただけであり、立場選択が理由想定に影響を与えているかどうかについては検討できていなかった。そこで第8章（研究5）では、大学生と専門学校生342名を対象に、立場選択を実験的要因として操作した理由産出課題を実施し、立場選択の有無が理由想定に与える影響を検討した。その結果、立場選択により書き手の立場を固定化することが多様な反論想定や、理由に対する柔軟な評価を抑制する可能性が示された。第9章（研究6）では、立場選択が「意見文産出プロセスにおける理由想定」にどのような

影響を与えるかを検討するため、大学生 115 名を対象としたレポート課題を用いた実験を行った。その結果、立場を固定化された学習者は、立場を自由に決められる学習者よりも反論想定における「迷い」を感じにくく、「迷い」を感じたとしてもクリティカルな反論をより弱い反論に置き換えるなど、反論に対して消極的な方略をとる可能性が示された。ここまでの研究 1～研究 6 の結果から、意見文産出におけるマイサイドバイアスの生起メカニズムのモデルを想定し、マイサイドバイアスの克服支援において焦点を当てるべきポイントを明確化した (Figure 1)。

第IV部では、マイサイドバイアスを克服するための「目標提示」、その目標を達成するための「方略提示」、そして目標達成を促進するための「役割付与」の3点の介入を含む「目標達成支援介入」の効果、小学生から中高生までを対象とした授業内実験研究によって検証した。なお、目標としては「反対立場の優勢性の検討」、「理由の明確化」、「読み手に対する意識」の3点を提示した。第10章(研究7)では、高校生125名を対象として目標達成支援介入の効果検証を行った。その結果、目標達成支援介入が意見文産出における反論想定と再反論の産出を促進することが示された。ただし、目標達成支援介入は高校生や大学生を対象とした研究(研究1～研究6)の結果から導出したものであるため、それが児童に対しても適した内容となっているかどうかを吟味する必要がある。そこで第11章(研究8)では、中学年児童30名を対象とし、中学年児童が読み手に合わせた意見文産出を行えるかどうかについて検討した。ここで、読み手に合わせた意見文産出に着目しているのは、目標達成支援介入では反対立場の読み手を想定し、読み手に合わせて意見文産出や理由想定を行うことが重要な目標となるためである。分析の結果、児童が読み手に合わせて

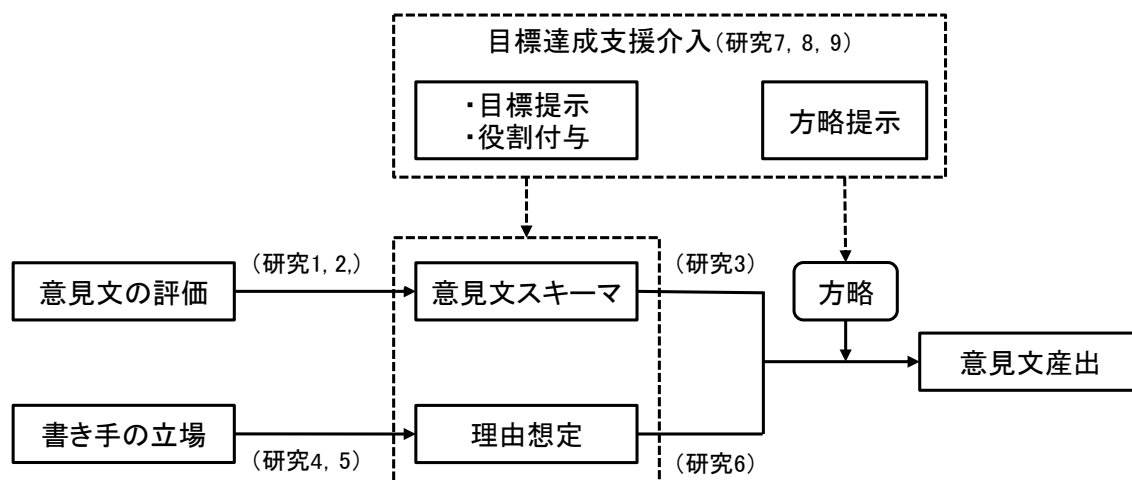


Figure 1 目標達成支援介入の焦点

意見文産出を行っていたことから、中学年以上の児童であれば目標達成支援介入が適用可能であることが示された。さらに第 12 章（研究 9）では、マイサイドバイアスの克服における児童のつまずきのポイントを明らかにし、それらのポイントに対する支援として目標達成支援介入が十分な適性を有しているかどうかを確認するため、予備実験において 65 名の中学年児童を対象とし、反対立場の読み手を想定した意見文産出を求めた。その結果、児童のつまずきのポイントとしては、(1) 反論想定はできても再反論ができない、(2) 例外となるような再反論が必要でない反論を想定する、(3) 目標達成の必要性を十分に理解していない、(4) 反論想定に悔しさを感じる、といった点が認められ、目標達成支援介入はこれらの点を克服する上で有用な支援方法となることが確認された。そこで本実験では、高学年児童 90 名を対象として目標達成支援介入の効果検証を行った。その結果、中高生と同様に、目標達成支援介入が児童の意見文産出における反論想定と再反論の産出を促進することが確認された。この結果は、学校教育に応用可能なマイサイドバイアスの克服支援方法を提案すると共に、Figure 1 のモデルがマイサイドバイアスの生起メカニズムの一側面を説明していることを示唆するものと考えられる。

第 V 部の総合考察では、これまでの研究のまとめを行い、本稿の結果がマイサイドバイアス研究に与える示唆と、学校教育の作文指導においてマイサイドバイアスを克服するための指導を取り入れる際に重要になる点について考察した。また、本稿の限界点について、方法論や発達の要因の考慮といった観点から論じ、今後の研究の展望について考察を行った。